

ひとり、ふたり、みたり、よったり

馬場 良二（日本語教育）

三人の子もちともなると、家でのんびりテレビを見ることもままならない。出張すると、アルコールは飲めないし、テレビの前でじっとしている。NHKの『新日本紀行』なんて家では見たことがない。その『新日本紀行』で東京の羽田あたりの話をしていた。『新日本紀行』の中では白黒の『日本紀行』のフィルムが流れ、羽田の住民は空港建設のために立ちのいたのだと知った。テレビ番組を見なくてもちょっと考えればわかりそうなことだが、それまで考えたことがなかった。

それで謎が解けた。こどものころ、羽田は海苔がとれておいしかったと聞いたことがあるし、父は祖父、祖母とともに羽田で育ったとも聞いたことがあったのだ。空港ができて海苔の養殖は途絶え、父家族は引っ越した。だから、おじいちゃんの家は千歳烏山だったんだ。変なところに住んでいるなどは思った。住宅街をこえて、駅から離れていたし、なんとなく唐突だった。

庭のある2階屋だった。酒好きの祖父はいつも煙管で刻み煙草をくゆらし、長火鉢の前に座っていた。印鑑彫の職人で、陽のあたる縁側でときおり印鑑を彫っていた。庭には盆栽、玄関脇には金魚の泳ぐ甕があった。

裏には手こぎ式のポンプ井戸があり、水をくませてくれと祖母にせがんだ。祖母は子ども嫌いで面倒がるばかり、使っていない井戸で水をくみ上げるには段取りが要ったのだ。

二人ともいつも着物を着ていた。祖母は髪を結びあげていた。父は「二〇三高地」と言っていた。その祖母は、「お金」とは言わず、足が生えて出ていっちゃうから「おあし」、くだものは「水菓子」で、渋谷や新宿を回っているのはショウセンだった。

父は、ナンポウ／南方に八年いたと聞く。酔って機嫌がいいとインドネシア語で歌った。左あごの下に傷があり、弾丸が通った跡だと言う。馬糞の中を匍匐（ほふく）前進し、糞を爪の間につめたまま飯盒をたいた。家族の中では一番きれい好きだったような気がする。戦場では病死が多かったと聞く。

甘いもの好きの戦友が羊糞そっくりの爆弾を喰い、腹痛を起こした時、看病した

話をした。そのもと戦友の家に連れて行かれたことがある。床屋だった。父は語りかけるが、床屋は店が気になるらしい。子ども心に歓迎されていない気がし、何でここにいるんだろう、はやく帰ればいいのにと考えたのを覚えている。

ナンポウに八年というのは母から聞いた。父が苦勞して従軍の証を集めてくれたと言ったことがある。だから、父はいやがられているようすの床屋に行ったんだ。人にものを請うことなどしない父は、家族のために頑張ったんだ。

父は、「まっつぐ」な人で、「ヒ」と「シ」の区別がつかなかった。母は南部千葉の出身で、鼻濁音は東京で身につけた。私は、日本語教師の職業のため練習した。油断をすると有声の摩擦音になってしまう。姉も鼻濁音はあやつらないが、どういうわけか兄だけは父から受け継いだ。そして、どういうわけか熊本生まれの三人のうち、長女だけは鼻濁音をつかっている。

祖母が世間話をしていると、「みたり」「よったり」と言う。「ひい、ふう、みい、よう」で、「ひとり、ふたり」なんだから、「みたり、よったり」は当然だ。秋永一枝編『東京弁辞典』2004、東京堂出版を見ると、「水菓子、おあし、まっつぐ、省線」はあるが、「みたり」「よったり」はない。

『東京弁辞典』の「序」を見ると、「震災、更に戦災により家を焼かれ、戦後の高度成長期には地上げに伴うビル化で家を追われ、東京旧市内（旧十五区）の東京弁話者は次々と周辺地域に追いたてられた。旧市内はニョキニョキとビルばかりのオフィス街となり、夜間人口は激減した。その土地を愛し、土地っ子と連帯感をもって付き合う慣習もすたれつつある。ましてや鍵一つで隣人の顔も知らないマンション族では、ことばの継承は覚束ない。加えて、日夜放送から流れる言葉はこの土地の言葉か分らない鶴語ともいべきもので、そうした全国共通語が国中を横行する。東京弁が消え東京共通語、首都圏語に変っていくように、日本全土で方言話者が減少し、今や国定教科書が目指した全国共通語にまっしぐらという状態である。恐らくこれが明治維新の目論んだ結果なのだろう。」とある。明治維新が目論んだからこうなったのかは分からないが、東京弁は消えている。私が話しているのも「共通語」であって「東京弁」ではない。毎日セリフを言っているような気がする。

『東京弁辞典』の「収録語の基準」は、「十九世紀・二十世紀に東京旧市内（江戸御府内を含む）で使われていた語で、現在はその使用が稀なもの、意義不明になったものを中心に採録した。出典が編者の好みに偏っていることは否めないが、出典の著者の言

語形成期(ほぼ小学生の頃)が二、三の例外はあるにせよ、東京旧市内であり、前述の東京弁の使い手の基準に該当するものから選んである。」それで、出典は小説、落語、新聞や雑誌の記事、辞書など広範にわたっている。「水菓子」の語義は、「果物」、「おあし」は「御足・御錢」で「おかね」、「まつつぐ」には「「まっすぐ」の転」とあり、「まつつぐにしておきな」と「槍を立ったらおめえ、あんなに曲がっていた腰がびんと…まっ直(つぐ)ンなったよ」という円生の例があった。「しょうせん」は「省線」で、「もと鉄道省・運輸省の管理下にあった鉄道線で、その電車もいう」。

『日本国語大辞典 第二版』2001、小学館の「しょうせん」には、小山死士の「薔薇一族」(1949)から「省線が通り過ぎる度に赤になったり緑になったりする信号塔の灯が見える」という例が引いてあった。やけにシャレている。「おあし」には、「日葡辞書「すなわち、ゼニ<訳>現金。女性のことば」」とある。原典を見てみると、「Voaxi Caixas. He palaura de molheres (をあし 箱。女のことば。)」となっている。caixas は caixa の複数形で、「箱」。文脈によって、「公庫、金庫」。当時のポルトガル人/日本語学習者たちは、これを見ただけで「おかね」だと分かったのだろうか。ここにも「まつつぐ」は「まっすぐ(真直)の変化した語」とある。東京弁の発音、という指摘はない。

『東京弁辞典』にはない「みたり」、「よったり」が『日国』にはあった。「よったり」には、「よたり(四人)」の変化した語。よにん。日葡辞書「Yottari(ヨツタリ)<訳>四人」とある。原典は「Yottari. Quatro homês」で、「Quatro homês」とは「four men」の意である。「みたり」には、「さんにん」とあり、「語誌」がある。「鎌倉、室町時代には、訓点資料にわずかながらミタリがあるが、仮名文学には見えない。室町時代以降の例は、学者や作家が作り上げた擬古的なものであろう。」ということだ。違うね。おばあちゃんが使っていたんだから。

留学のための試験は大学院の入学試験と同時期で、その1年後、ブラジルへ発った。出発は羽田で、2年後の帰国は成田だった。あの空港の敷地のどこかで父たち家族が暮らしていたのだとは思いもしなかった。タラップからは、空港ビルの屋上から手をふっている母と姉が見えた。機内にはいり席に着いても窓から見えた。中にいる自分が見えないと二人は心配するんじゃないかと心配したが、あとから考えると、母と姉が心配だったのではなく、旅立つ自分が不安だったのだと思う。家に二人を残してしまうことだけでなく。